



強調しておくが、我々コンビは笑いと同様、文学に対しても真摯であり続けた。なにしろ「文芸漫談」というくらいだ。文学をおろそかにしては成り立たない芸である。

普通、文学入門書は、^ニグングン文学がわかる、のが取り柄だが、我々はグングンだけではどうも満足出来ない。理解の速度も重要ではありながら、納得の瞬間ごとにクスクスと笑いが生じないことには、文学の根幹が貧しくなってしまうのではないかと我々コンビは心配しているのである。

豊かな文学、とよく人は言う。けれども、何がどう豊かであるべきかを示す者はまれである。少なくとも我々は、文学を語る事が同時に笑いを呼ぶという事態を希求した。それこそが豊かさのあり得べき具体例だろうと考えたからに違いない。
 (『文芸漫談 笑うブンガク入門』いとうせいこう氏 まえがきより)

小説の書き方・読み方がクスクスわかる

ここ数年、書店を訪れると、「小説の書き方」といった類の本がやたらと眼につくのは、小説を読みたい人より、小説を書きたい人の方が多いという、時代の趨勢のなせる業なのであろう。

実際に観客を前に話をしているときには、「入門書」を作ろうとの狙いが殊更にあったわけではなく、とりあえず「小説」ないし「文学」を題材に、いとうさんと二人、お客さんの反応を窺いつつ、あれこれ話すのが馬鹿に面白いので、機会を捉えてはどんどん喋っただけの話である。

どちらにしても、面白いのは、やはりライブである。少なくとも喋っている本人たちにとってはそうである。そして、演じる者が楽しめないのでは、観客だって楽しくないという、ジャズのセッションと同じ原則の下で「漫談」は行われた。だから、本書を読んで少しでも面白いと思って下さった方は、是非ともライブにいらして欲しいと思います。

(『文芸漫談 笑うブンガク入門』奥泉光氏 あとがきより)

【いとうせいこう】

1961年、東京生まれ。早稲田大学法学部卒業。作家、クリエイター。「ノーライフキング」で小説家としてデビュー。最新刊に『鼻に挟み撃ち 他三編』『想像ラジオ』『存在しない小説』。2013年から「いとうせいこうレトロスペクティブ」として『ワールズ・エンド・ガーデン』『解体屋外伝』『未刊行小説集』を刊行。

HP <http://www.cubeinc.co.jp/ito/>

【奥泉光】

1956年、山形生まれ。国際基督教大学大学院修了。小説家・近畿大学教授。「石の来歴」で第110回芥川賞受賞。最新刊に『東京自叙伝』。主な小説に『虫樹音楽集』『シューマンの指』『神器 軍艦「権原」殺人事件』『グランド・ミステリー』など。いとうせいこうとの共著に『文学の聖典』『世界文学は面白い。』がある。

HP <http://www.okuizumi.com/>

北沢タウンホールでおこなった「文芸漫談」シーズン2待望の単行本化
『世界文学は面白い。文芸漫談で地球一周』 奥泉光×いとうせいこう
 集英社刊 本体1,600円 好評発売中